資料

明治初年の東京大学医学部「方函」(二)

小関恒雄

○黴毒症

沃剝一匁　水四匁　右調合一食匕宛一日四次

又方　サルサハリルラ油十四匁　癒瘡木油剝七匁　サツサフラ油剝三匁半

右調合二十八包ニ分三壜ノ水ヲ以煎テ二壜トナシ毎朝半壜ヲ温服セシメ残余ハ二分トナシ昼夕之ヲ冷服スベシ

又方　下剤　大黄　葯剌巴各二錢半

右五包二分八日毎ニ服

又方　昇汞丸　昇汞二口　甘草末一錢強

右蒸餅心適宜ヲ以百丸トナシ初日ニ三丸ヲ服シ一日一丸宛増

単沃陳汞丸　単沃陳汞十匁　甘草膏適

右六十丸トシ二丸宛日三都合十日ニシテ其全量ヲ尽ス

梅毒性気管支加答児

吐根十二匁沸湯六匁ニ浸出シ単舎一匁ヲ加ヘ毎二字一食匕兼テ沃度ヲ用

昇汞歯齦塗擦薬

昇汞六匁或ハ三匁　玫瑰密一匁

右梅毒ヨリ来ル歯齦腐潰ニ塗擦ス

癩性横痃方

昇汞六匁　阿片三匁　甘汞一匁

右六十丸トナシ初日一丸ヲ服シ一日一丸ヲ増加ス

又方　規尼十匁　稀硫酸十五m　水三匁　一日分服

又方　亜砒酸二匁　家猪脂一匁　阿片一匁　右等分ニ貼ス

又方　莨菪越六匁　鉛糖一匁　水一匁　右綿絲ニ蒸シ貼ス

又方　単寧五匁　水一匁　洗料

梅毒性咽結毒塗擦方

昇汞六匁　護謨漿一匁　右筆ヲ以瘡部ニ塗ル

梅毒性瘰癧並疳瘡

沃鉄利別一匁　水五匁　日分　皓礬二十匁　水一匁　外用

頑固ノ梅毒骨膜ヲ浸シ膝関節或ハ倔伸スル能ハス秋ニ至リ如此ノ症ヲ発シ頻ニ沃剝ヲ用フ　効者

硝剝二匁　水一巴　一日ノ量

梅毒咽喉結毒

沃剝十匁　コロシキユム酒一匁　水三匁　日量

含嗽剤

樟汞一匁　蜂蜜半匁　水十匁　二日量

又方　塩酸剝一匁半　水十匁　二日量

第三期梅毒咽喉腐爛兼下疳

沃剝三十匁　サルサx半匁　水三匁　一日量

□六十倍石炭酸

疳瘡兼便毒

沃剝一匁　甘膏十匁　甘末適　一日量

疳瘡洗薬　硝酸銀三十□　水五匁

慢性梅毒僂麻質左肩胛骨節固者

沃剝二十氏　且丁一号　コロシキユム酒三十m

右一日量外用肝油三号

〔以下、略〕

○腸胃熱

蒲公英x一号　礦砂半号　右一日三次分服

○僂麻質斯

僂麻質斯病

硝酸加里半号　阿片丁二号　餾水八号　甘膏　毎二字一食七

甫主宰運動機器ノ病

僂麻チス方　硝石二号　阿片丁二号　甘草膏二号　毎二字一食七

又方　外用純沃陳一刃　石脳油半号　痛処ニ塗布

十日前発熱肩背痛胸部ニ在ロ吻麻痺微咳アリ

安質没尼酒一号　コロシキユム酒一号　規尼丁キ一号　水三号　日量

七八日経テ胸痛痙攣顔面痛者

規尼三氏　稀硫十m　舎塩二号　水三号　右日量

同関節痛

コロシキユム酒四十五m　重曹三十氏　モルヒネ十m　水三号　一日分

慢性僂麻質斯

ホツクホートハルス丁口氏　双蘭苏x四氏　竜脳二氏　吐酒石一氏

右丸一日量

関節僂麻質斯

外用　ヲボテルトー一名ハルサレ　一号

同内薬　コロシキユム酒三十m　ホツクホ丁幾二号　竜脳水半氏

水三号　日量

膝蓋僂麻チス兼淋疾

沃剝二十八氏　ホツクホー丁一号半　コロシキユム酒一号　水三号　日量

〔以下、略〕

○雑病

タイホイト症譫語煩悶便中血混

一半コロール鉄液五滴　ラウタニーム五m　コム漿一号

日ニ三下血止ヲ度トス

食慾催進方

酒製大黄丁一号　苦薬丁半号　橙舎一号　香竄丁キ一号

右一茶匕日三回

○脱疽

羅斯性脱疽方

赤□汞十氏　単膏二号　右瘡上ニ貼ス

又方　規那煎一号　日三

又方　沃剝一号　隔日ニ沃剝浴ヲ施ス間日ハ沃陳丁ヲヌル

又方　吐酒石六氏　水六号　右□字毎ニ半食七

又方　蘇合香膏　腐肉部ニ塗ル

又方　沃剝膏　生肉部ニ塗ル

痔疾

甫脱肛方

莫非三氏　水製ホミカx十氏　甘末　甘膏各十氏

右三十丸トナシ毎日三字一丸

又方　硝酸六匁　水一刃ニ溶解シ二滴ヲサーレツフ煎一匁ニ滴シ灌腸ス

小児肛囲ノ潰瘡

石灰水四匁　黄丁三十m　水二匁　右一日分服

痔血閉止ヨリ来ル耳聾

蒲公英α半匁　稀□酸三十m　硫酸麻倔水三匁　日量

〔略〕

脱肛経数年不癒者老七十余佐藤先生是ニ

炭酸曹麻倔各一刃　且丁二十m　水三匁　肛ノ周囲ニラーヒスツインヲ施ス足ノ左内脛痛□有痛者

宮下氏(7)診之云傷冷毒ト

鉛糖二十匁　水五匁　患部ヲ洗フ

服薬　コロシキユム酒二十m　硝石一匁　水三匁

○水腫病

実支浸三匁　酒石英三匁　右一日六次ニ分服

男子得病三日顔足部共微腫

舎塩半匁　炭曹一匁　橙皮丁一匁　水三匁　右日量

佐藤診之云　硝剝一匁ヲ用

老人七十有余下焦水腫スル者

甘硝石精一匁　実支丁□十m　醋剝一匁　水三匁　日量

男子十五才一身満腫下利腎慢性炎也　佐藤是ニ

実支六匁沸湯四匁ニ浸シテトリ　硝石三十匁　甘硝石精一匁　単舎二匁

右一日量

○嬰児病

小児疳労

甘汞二匁　乳□二錢　右十六包トシ一日一包宛三回

初生児眼炎方

甘汞四分匁ノ一　散トシ一日二回

又方　水銀膏　顳顬ニ塗擦ス　一匁ラーヒス水一日二回点眼

小児一才スコル性脳煩

規尼一匁　甘汞一匁　実支一匁　一日量

〔略〕

小児生テ九月百日咳ニカヽル劇症

クロマイト八匁　吐根二匁　沸湯二匁　溶解単舎半匁　右二日ノ量

〔略〕

小児三才発熱咳嗽

吐根半匁　甘汞一匁　キニーネ二匁　糖十匁

小児女三才薄弱患症下利

吐根一匁　ラハル三匁　マクネシヤ十匁　右為散三包

小児百日咳

甘汞　護謨末　右日量

〔略〕

乳病

蒲公英α一匁　水四匁　一日二分服或ハ内外沃剝剤可ナリト云

止血方

明礬一分　亜ラヒアコム二分ノモノ　撒布

○眼鼻耳諸病

皓礬水

皓礬十匁　水十匁
右鼻中ヲ洗フ但シ膿出ル者ニ用ヒタリ
水銀膏一匁　阿夫蓉四匁
右研和眼炎ノ疼痛甚シキ者ニ眼囲ニ塗布ス
白降膏
白降汞一匁　脂二匁
右研和用膜曇翳ニ塗ス或ハ点入ス
カタラクト初期ノ方　燐一カラム　オレーフ油三百カラム
右混和前額上ニヌルコト一日六十m
眼瞼糜爛塗布方
赤降汞半匁　猪脂一匁　亜鉛花三匁
カタラクト方
昇汞六匁　黄末二十匁　ステレキニーネ二匁
右□十丸トナシ朝夕一粒宛服ス
又方　顳顬発泡ヲ貼シ后ステレキニーネ皮下撒布
カタラクト角膜曇暗者
白降汞二匁　リスリン半匁　脂一匁半　混和点眼
点眼水
皓礬二匁　水一匁
眼炎慢性
皓礬五匁　コム十匁　水二匁　半日量
眼赤兼発熱発疹　点眼水
皓礬二匁　水一匁
眼脈絡膜炎衝ニ因テ色素ヲ旋転スル症点眼
ラウタニーム二匁　水二匁　右点眼
眼結膜顆粒状炎衝
塩酸鉄丁二十m　水三匁　右点眼
眼角膜炎衝脂方様物浸之
幾那一匁水八匁ヲ以煎シテ六匁ヲ取橙皮半匁塩酸鉄丁三十mヲ加ヘ
日量
ラウリニーム半匁　水半匁　右点眼
眼赤右目ニ腫物アリ則点眼
ラーヒス煎　センナ浸三匁　舎塩半匁　右日量
小児二才ノ時右眼星ヲ生シ
皎礬一匁　水一匁　右点眼
ラハル三匁　マクネ八匁　右散一日量
眼斂備紅者遺毒伝毒ニ属スル者也
沃鉄舎一匁　且丁一匁　水三匁　一日量
洗眼剤
皓十匁　アラヒア五匁　冷水十匁
小児三才眼瞼炎衝スルモノ
ヤーラツパ五匁　甘汞二匁
右頓服　皓礬水点洗頭部ニ強泡ヲ貼ス
点眼ハ　硝銀半□　水一匁
右佐々木師興〔東洋〕診之云□多クハ伝染毒ヨリ来ル翌日佐藤
尚仲転方五匁ラーヒス水ヲ点シテ是ヲ与
沃鉄舎十五m　水半匁　日量
男子左眼赤色羞明眼赤紅

銀硝十匁　眼瞼ニサシ

皓礬一匁半　水一匁　硫酸苦土三匁　且丁一匁　内服

男子四十才昨春半眼ヲ失シ当七日ヨリ左眼痛ヲ覚漢医蒸剤ヲ与テ今日如此ニ至佐々木診之云是基ハ瘀衝眼ヨリ来ルモノ也今已ニ瞳孔ニ膿ヲナシ是吸収半球膿化スルモノ

スルモ不能也ト　三十匁ノラーヒス水眼瞼擦シ　皎礬水

耳鳴滴入薬

リスリン三匁　オレーフ油二匁

耳中充血ヨリ起因セル耳聾

甘汞半匁　金硫半匁　マクネシ一刃

〔略〕

耳漏　佐藤先生

沃鉄金一匁　水三匁　右日量

男子十日以来両耳蟬鳴□他症

リスリン　ヲレーフ油各二匁　右耳中滴入

小児痳疹后耳聾瘰々性ニ□

沃鉄舎二十五m　且丁三十m　水三匁　右日量

リスリン　ヲレーフ油各二分　右耳中滴入

鼻痔ヲ収縮スル方

枯礬半匁　銀末五匁　単寧二匁ヨリ一匁　硫酸銅二匁　水十匁　右

日ニ三回或ハ四回

〔略〕

眼常用方

モロヒア水二匁　水一匁　眼痛甚キ者　硫酸銅二匁乃至五匁　眼炎

硫酸銀□□二匁

梅毒性眼炎甚キ者

シユレキニ匁　掃露水適

掃露水

蓬砂六分　竜脳二分　硝石二分　亜鉛花六分　葛粉七分

右半剤

○動脈諸症

動脈瘤注射方

水製麦奴x八m　ウーヲトル八m

右一回ノ量瘤上皮下ニ射注スルコト日ニ二回

又方　水製保美加x二瓦半　精製焼酎　グシリン各七瓦

右混和六七m或ハ一瓦宛注入スルコト週間三回三瓦中廿三mヲ含ム此方稠厚ニシテ注入ニ堪サルヲ以適宜ニ水ヲ混ス

○胸肋病

胸膜炎

吐根十二匁　実支十二匁　ウーヲトル五匁　ニ浸出シ

硝酸加里二匁　莫爾非涅水半匁　単舎一匁　ヲ加ヘ

毎二字一食七兼テ胸部ニ芥子泥ヲ貼ス

又方　硝石半匁　阿片丁一匁　水八匁　甘草膏半匁

毎一字一食七

胸肋病一男皇城炎焼ニ身労シ奔走シテ胸痛東洋先生診之云是運動劇シクシテ胸肋痙攣ヲ発スルナリ投左方

莨菪x一匁　重炭酸半匁　為三包

少年肋骨苦痛呼吸ヲ深クスルコト不能延テ月重不治小腹痛ア

リ佐藤先生診之云慢性胸膜炎ト
モルヒネ五分瓦ノ一　重炭二刃　ラハル六瓦　コロリス三瓦
外用擦剤　ハルサムヲボテン
肋膜炎
硝剝三十瓦　ラウタ三十m　コム漿三匁
又佐藤語予云胸脇病兼疳瘡
沃剝十二瓦　舎利塩二匁　且丁十m　水三匁
外用　皓礬二十瓦　水十匁
肋膜炎兼肺炎
吐根十二瓦　実支末十二瓦　沸湯六匁　ニ浸出　硝剝二匁　単舎半匁ヲ加フ
右毎二字一食匕胸痛甚者ハ莫非八分瓦ノ一ヲ加
慢性肋膜炎后滲出物残留スル者
炭酸加糖鉄二匁　塩規尼一刃　甘末　甘膏各一匁　コム漿適宜ヲ以百二十丸トナシ四丸宛一日三回
摘要胸膜炎方
甘汞六瓦　阿片三瓦乃至六瓦　吐酒石一瓦半ヲ取混和シテ十二包ニ分チ毎三四字三包ヲ服
右ノ方ヲ用テ熱勢減退シ或ハ嘔吐ヲ起ストキハ吐酒石ヲ去ヘシ又痛未タ止サル者ニハ甘汞阿片ヲ持重シ用テ可也然トモ注意シテ甘汞ノ流□ト阿片ノ麻酔トヲ避ク可シ又疼痛依然トシテ尚止ラサル者ハ肌熱著シク減退スルヲ待テ速ニ大発泡ヲ患部ニ貼ス可シ
海葱末半匁　実支末八瓦至十六瓦ヲ取混和シテ十六丸ニ分チ一日三次一丸ヲ与フ
複方　杜松子精二匁ヲ取毎服一匁或ハ二匁ヲ一日三次水一酒盞ニ和服
療方大芥子泥ヲ患部ニ貼シ石礦軟膏或ハ礦砂揮発膏塗擦シ乾角法ヲ施シ又痛楚頑然トシテ止サル者若クハ其劇烈ナル者ニハ発泡膏ヲ貼スル等ヲ以適当トス
肋間神経痛療方
発作間ハ双蘭芍丁キ嘧囉咈若クハ歇羅篤里亜膏ヲ患部ニ擦入スヘシ
右ノ法方ニ由テ軽快ヲ得サルトキハ適宜ノ発泡膏ヲ貼シ泡ヲ発スルニ至テ之ヲ破テ醋酸モルヒ水一瓦乃至二瓦ヲコム末ニ和シ撒布シ或ハモルヒ水ヲ以皮下注射法ヲ行フモ亦可也其他患者ノ景況ニ従テ鉄剤規尼或ハ規那等ヲ撰用スヘシ
○喉頭病
慢性咽喉聖京倔
硝酸銀一瓦　澱粉　右以竹管口内ニ吹撒ス
○四肢諸病
指趾麻痺ヲ患テ今年再前症ヲ発下肢及ヒ腰部ニ麻痺心悸動甚シキ脚気
実支浸　臭素　硝剝　酸剝　水三匁
男子左手小指□ノ且大サ大豆三粒斗
ホーレル水　一日一度或ハ二度久ク用是ハ必功アリ
男子四十三右足脛攣痛佐藤診小腹閉塞ヨリ来ルト投左方
純酒石半匁　硫黄花二刃　ラハル五瓦　日量

患部外用　ハルサレホラルトウ
大指痛ヲ発スルモノ
双蘭菊ℳ五匁　金硫黄一匁　竜脳三匁　右為散日量
外用ハルサムホテル
両肢痛アリテ又麻痺スルモノ
沃剝十匁　礦砂二十匁　舎利一㋆　水三㋆　右日量
凍瘡或ハ火焼ハ治療一同ナリト云
佐藤曰予殆ト其病理ヲ不知雖然不異乎火傷ハ機械的ノ所到凍瘡ハ天冷風土ニ関スル処ナリ治方妙ナル一様ニシテ治セハ是ヲ良方ト云表皮紫紅色剝離ス□□絶エス冷水ヲ注其痛ヲ止次ニ家猪脂又蜂蜜ヲ取布ニ擁貼ス
○間歇熱
規尼六匁　蒲公越一刃　右為丸日量
ホーレル水五m　健質亜那丁一㋆半　水三㋆　日量
規尼十匁　発時前一時半ニ頓服カシルレ浸五㋆　常用下剤
男子四十才間日発熱数日不愈終四日間一発□トナリ肝脾肥大
規尼六匁　蒲公ℳ一刃　為丸三包一日量
ホーレル水九m　健胃丁一㋆　水三㋆　日量
○諸失血
慢性下血兼乏血
水三㋆　且丁一㋆　塩酸鉄丁三十m　右日分外冷水ニテ注射日三回
□服下血
テレ□□油八m　コム漿二㋆　右日量
○頭痛
頭痛熱脈九十度
舎塩二㋆　ラハル丁幾二㋆　水三㋆　日量
男子年四十余左偏頭痛経久不愈
注入法　キニーネ十分匁ノ一　硫酸二m　水十m
左右頭后ニ神経ナク□ス処射注スヘシ
五月下旬ヨリ頭痛ヲ患ル后僅ニ軽快スレトモ二三日以前又発作ス
双蘭芍ℳ六匁　規尼五匁　右九日分　莫非八分匁ノ一　コロクス九匁ヲ加
頭痛不止
白降汞十匁　家猪脂一㋆半　莫若ℳ十二匁　モルヒネ二匁
右軟膏トナシ前額部ニ塗布ス
常日感冒頭痛是則漢ノ紫圭ヲ用ル症
接骨浸一㋆　礦砂精三m　日量
○破傷風
ラフタ三十m　水一㋆　毎二時ニ用
格魯布
尾州公姫年三才疑似声嗄スルナ□因テ気管支炎ナルヲシリ左方ヲ投シテ愈
吐酒石一匁　水一㋆　右溶和
浸剤
吐根三匁　沸湯一㋆ヲ以出シ
硝剝五匁　単舎一㋆　民精一㋆　右二日ノ量毎二字用
摘要療方陽実ノ症ニ於テハ早期ニ□□乱刺若クハ水蛭若クハ刺

絡ヲ要スヘシ
凡格魯布ニ於テ吐剤ヲ用ント欲セハ吐根明礬ノ合剤ヲ以スルヲ最モ安全ノ策トス
吐根明礬各細末半匁斗ヲ取水ヲ加混和シテ用但シ之ヲ用テ□ム

○嘔吐

慢性嘔吐

炭曹四十瓦　炭酸鉄六瓦　モ七八分瓦ノ一　ラハル三瓦　茴香油三m
右散一日

暑中嘔吐苦水ヲ吐スル者

量曹一匁　枸橼酸二匁　餾水五匁
右和シ単舎一匁ヲ加フ　毎時一食匕

経久嘔吐

硝酸蒼鉛十瓦　黄末二瓦　莨菪x半瓦　糖適　日三

黄胆

稀硝酸十五m　蒲公x十五瓦　黄丁キ二十m　水一匁　右日量
甘汞一〇　黄末半匁　蘆薈半匁　白糖一匁　右廿包トシ一日四次

発熱眼中黄□小便黄色ヲ現

甘汞六瓦　ヤーラッハ六瓦　右為丸頓服
□イ丁一匁　重曹一匁　水三匁　日量

○頭脳病

神経熱痙后

規尼二瓦　稀硫酸十m　舎塩二匁　水三匁

小児一才スコル性脳□

規尼一瓦　甘汞一瓦　実支一瓦　一日量

○面病

左半面病

沃剥十瓦　舎利別一匁　炭曹一匁

全身疼痛

硝酸加里半匁　阿片丁二匁　餾水八匁　甘膏半匁　毎二字一食匕

骨痛症

硝剥半匁　阿片半匁　浄水六匁　右毎二字一食匕

慢性ニシテ四支厥冷スル者

ホルト酒一匁　水二匁　単舎半匁　一日服
又方　硝石　純精酒□各二匁　右一日ニ一二茶匕水ニ溶
又方　吐根一刃　硝剥二匁　熱水ニ浸出シ毎二字一食匕

肝油用法

肝油ヲ用ル前ホフマン液十五m宛服セシム是水液ノ分泌ヲ増油質ヲ消化セシムルノ目的アリ

チヒス熱頓挫方

塩酸規尼十瓦　丸頓服半時ヲ経テ又一方ヲ用

諸獣咬傷

甘汞二瓦　莨菪x半瓦　丸日三外用水銀膏
アルニカ浸一匁　硝石一刃　日三

○胃ノ急性中毒病

胃ノ急性中毒病ハ胃病中最モ貴重ナリトス又卒子僅微ノ量ヲ用ヒ胃ニ入甚シク荒□炎腫スルモノ□子毒ト云中毒ノ害患ハ二種アリ即チ舎密性ノ作用ヲナス者アリ或ハ器械性ノ作用ヲナスモノアリ硝子金属□□髪ノ如キ胃内ニテ粘膜ヲ刺戟シ炎腫ヲ発ス

ルカ如キハ器械ノ作用ニ属シ稠密厚鉱酸腐蝕加里銀塩項塩銅鉛亜鉛ノ諸塩燐沃陳莫強□アルコール青酸芫菁ノ如キ舎密性ノ作用ヲナスモノナリ屍躰ヲ解剖スルニ炎腫エキシニダート膿潰或ハ□壊疽ニ陥ルヲ見ル急性ノ中毒症ニ死スルモ□□解剖スルニヨル胃内炭化シテ黒色ニ或ハ穿孔シ或ハ腐蝕スルヲ見ル炎腫ノ初期ノ如キモノアリ或ハ膿潰スルモノアリテ胃同処不同症候中毒症ノ峻劇ナラサルモノハ胃部炎熱焔カ如シ或ハ冷微スルヲ覚次ニ吐逆ヲ起ス此ノ吐逆少シニテモ飲食スル時ハ直ニ発来ス此症速ニ吐逆ヲ発スル者ハ毒物ヲ排泄シ良ナリ煩渇アリ胃部ヲ圧スルニ疼痛シ下利ニ血ヲ交ルコトアリ或ハ秘閉スルコトアリ手足欠冷顔面惨憺陥没シテ眩暈譫言戦慄シテ麻痺ヲ起シ脈至微細漸〻沈没□終ニ死ニ陥ル

中毒症ハ毒物ノ性及量ニ依テ変化同シカラス仮令ハ稠厚硫酸ハ局処ニ慢性炎ヲ発シ其死スルヤ速カナラス或ハ医ノ如キモ刺戟薬ヲ妄用シテ胃炎ヲ起テ死地ニ陥ラシムコトアリ此ノ如キ症ハ卒然死セスト雖終ニハ死スルニ至ルヘシ日本ニ於テハ漢医者概シテ刺戟薬ヲ慢投シ死期ヲ促スコト多カラン和蘭ニ在テモ往々之アリ余□医生(8)キニーネヲ与ヘシニ和蘭ニ在テモ云々ノ以下了解難為ノ章アリ依之省略シテ不載

消毒方

第一　腐蝕酸即チ鉱酸ノ中毒ニ於テハ

麻倔涅矢亜石礬曹達石灰水傑烈□土ノ如シ爰ニ人アリ硫酸ヲ誤用シ其急ヲ救ハント欲セハ速ニ□壁ヲ削リテ附与スヘシ

第二　腐蝕剝多亜斯ノ〔中毒ニ於テハ〕

植酸油ノ如シ医患者ノ咽喉ニ剝多亜斯ヲ塗布スル誤テ咽喉内ニ入嚥下ス時ニ当テハ許多ノ醋ヲ与ベシ之ニ由テ醋酸剝トナリテ毒功ヲ失フヘシ

第三　銀鉛ノ〔中毒ニ於テハ〕

食塩ヲ与ヘシ銀ト抱合シテ塩酸銀コロールシルユルトナリ溶解シ難キ質トナルヘシ

第四　昇噴毒

鶏子白□ケレー就中鶏子白ハ昇汞ト抱合シテ溶解シ難キ者ナリ故ニ之ヲ撰用スヘシ或ハ麻倔矢亜硫酸鉄ノ如シ

第五　銅黄〔ニ於テハ〕

鶏子白乳汁タンニーネ

第六　燐毒〔ニ於テハ〕

鶏子白石灰ノ如シ

第七　沃陳□〔ノ中毒ニ於テハ〕

澱粉ヲ含有スルモノ仮令ハ米穀芋ノ如シ

第八　酸□酸毒ハ

石灰水ヲ与フ

第九　青酸毒〔ニ於テハ〕

蘇魯林木脂礪砂ヲ与フ

第十　ステレキニーネ毒ニ〔於テハ〕

蘇魯林水沃陳溶液タンニーネ□□□動物□ノ如シ

第十一　ニコチネ烟草ノ元素ノ〔中毒ニ於テハ〕

濃煎骨喜竜脳ヲ与フ

第十二　アンニチネコロシキーム等ノ毒〔ニ於テハ〕

タンニーネ及ローイスレリンヲ含ムモノ即チ水楊皮槲ノ煎汁ヲ用

第十三　モルヒネ毒〔ニ於テハ〕

骨喜醋酸タンニーネ及ヒ頭部寒罨法

第十四　莞菁毒阿片莨菪カンプルヲ与

第十五　茸毒〔ニ於テハ〕

濃煎骨喜タンニーネ食塩ナリ如此消毒薬ノ効用ハ毒物ト抱合シテ溶融セサラシメ或ハ毒物ヲ分析シテ毒功ヲ失ハシムルヲ見レハ続発ノ胃炎療スルニアリ即チ胃炎條下ニ載示セル所置ヲ行フ可シ

注

(1)「府県病院略表」（医事新聞三号）一八七八、富士川游編『東京医事一覧』一八九〇、工藤鉄男編『日本東京医事通覧』一九一〇、『最近調査医療案内』一九一〇、『帝国医鑑』一九一〇など、管見の限りでは所在地等不明。

(2) 佐藤（一八二七～一八八二）、佐々木（一八三九～一九一八）とも、明治二～五年、大学東校（東校）に居った（『順天堂史』上巻、一九八〇。小川鼎三・他、日本医史学雑誌二九巻三号、一九八三）。だから、本書をミュルレル＝ホフマン来任以前のものと限ることはできまい。（そもそも「両教師」からはとっさに「両外人」教師が連想されよう。「教師」とは「御雇教師」を指していた。ちなみに外人教師なら、短期間ながらボードイン、マッセ、シモンズも居ったが。）ともかく、佐藤や佐々木に直接師事したか或は配下のものが書留めた処方集とでもいえようか。（それなら、明治五年以降でもよかろう。）

一方、別に「忽氏方譜」（内題「大医学校忽氏方譜」）と題する写筆本がある（同研究所蔵）。当時、東大医学部を「大医学校」「東京大医学校」とも呼んでいたらしい（例えば、慶応大学医学部「富士川文庫」所収の講義ノート類参照）。すると「忽氏」は前述ホフマンを指すことになろうか。ともかく内容（処方）は該「方譜」に類似（所々一致）している。因に「方譜」巻末に「大学東校内科教師独人ホフマン（忽布満）氏ノ処方集也」とあるが、ただし一九四二年当時所蔵者のメモ書である。

以上より、「方函」はミュルレル＝ホフマン（指導）の処方集と推断したい。

(3) 小関恒雄、日本医史学雑誌、二九巻三号、一九八三。

(4) 脚気と下痢の箇所であるが、両方とも前述「忽氏方譜」[2]と処方（記載）が殆ど同じである。

(5) とくに「ニ、二」「刃、刄（刄?）」「ヲ、ラ、テ」「シ、レ、ン」などの区別。

(6) 森鼻宗次編『日用薬剤分量考』一八七三。樫村清徳『新纂薬物学』一八七七。太田典礼、古医学月報四～六号、一九七四。戸塚武比古、日本医史学雑誌、二九巻三号、一九八三。

(7) 宮下とは、宮下慎堂（明治十四年没、享年四十八）のこと

であろう。彼は佐藤尚中門で、明治三〜五年大学東校に勤めていた（『明治過去帳』一九七一、前掲『順天堂史』）。

（8）「余」とは誰のことであろうか。また何を「省略」したのかも、これだけでは断じ得ない。

（新潟大学医学部）